

## Abydos 遺跡出土人骨の歯科疾患及び頭蓋骨に見られたストレスマーカーについて

藤田 尚(新潟県立看護大学・看護・生物人類)

### はじめに

一昨年のことであるが、英国ケンブリッジ大学ダックワースラボラトリーの訪問研究員になることができ、何度かケンブリッジに足を運んでいる。このラボには、多くのアフリカの古人骨のコレクションがあり、これまで主として日本やアジアを中心に歯の古病理学に携わってきた演者にとって、新鮮な資料であった。このダックワースコレクションの中に、エジプトの Abydos 遺跡出土人骨が、収蔵されていたので、彼らの歯科疾患を中心に、頭蓋骨のストレスマーカーである、Cribra Orbitalia、Hyperostosis on Crania について、データを取得した。その結果はまだ個々の疾患（ストレスマーカー）の頻度を算出した段階ではあるが、貴重な資料と考えられるので、今回のシンポジウムでその概要を報告する。

### 結果

資料は英国の著名な考古学者によって 1900 年に発掘され、ケンブリッジ大学に収蔵された。しかし、仄聞するところでは、本資料は他国・他大学にも収蔵されているとのことである。ケンブリッジ大学収蔵のコレクションは、Postcranial skeleton は無く、頭蓋のみの資料である。齲蝕率は全体として 4% 台前半であるが、熟年女性の齲蝕率が非常に高いことは特徴的である。また齲蝕の発症部位は根面齲蝕が歯冠部齲蝕を若干上回るが、有意差は認められない。歯の生前喪失（AMTL）は比較的低く、これは演者が他の集団で報告しているように、古代人は歯周病を早くから患っていたものの、熟年期までは、歯の喪失に至らず、老年期に入って多くの歯を失っていた状況は、Abydos 人骨でも同様だったと思われる。歯の咬耗は著しく、日本の縄文人に匹敵するほどである（図 1）。また咬耗度には明らかな加齢変化（加齢による咬耗の進行）が認められた。歯周病のひとつの指標となる歯槽骨の退縮度を、上顎下顎の M1 で測定した。その結果、歯槽骨の退縮は加齢とともに進み、歯の支持がままなくなっていたであろう状況が推測された。Abscess は男性女性ともに見られるが、壮年期は前歯部、熟年期になると後歯部に好発する。エナメル質減形成は、全体として 20% 程度の個体に出現しているが、重症例は少ないこと、また熟年男性に極端に少ないことが特徴である。歯石は壮年期に多く熟年期には少なくなるという興味ある結果が得られた。クリブラオルビタリアも同様に、壮年期個体に多く、熟年期個体は少ない。また程度は軽度の Porotic type もしくは、Cribrotic type が主であり、重症例はほとんど見られなかった。Porotic hyperostosis on Crania に関しても、重症例はほとんど見られず、全体としての頻度は 4% 台であった。

### 考察

ソマリアやナイジェリアなど、アフリカの現代人を調査した結果と比較すると、齲蝕率は高く、このことは古代エジプト王朝期の人々の食生活が、むしろ近現代のアフリカ諸国の人々よりも良好であったとも考えられる。但し、齲蝕率は砂糖や炭水化物の摂取量と密接な関係が有ると思量され、身体の抵抗力を高める動物性たんぱく質や脂質の摂取量がどれほどであったか、などの考察要因は残る。歯周病に関しては、演者のこれまでの多くの古人骨集団と同様に、壮年期、熟年期の個体は、歯の残存数が良好である一方、歯槽骨の退縮度などは、加齢による進行が明らかであり、古代エジプト人の多くが歯周病に罹患していたことを示唆する（図 2）。エナメル質減形成、クリブラオルビタリア、Porotic

hyperostosis Crania などは、出現するものの、その症状は軽度であり、これは、重症例があったとしても、それは乳幼児期であり、骨が脆く出土しないことによると思われる。更には、重症例が見つからないことによって、その集団の健康度が良好であったとする表面的な解釈をしてはならず、前述のように重症例の個体は、成人期に達する前にその命を落としていた、と捉えるべきである。今回の Abydos 人骨からも、多くの貴重なデータの取得が出来たが、Abydos 人の健康度の総合的な解釈には、慎重を期さねばならない。



図 1.



図 2.